

宿命としての「動物」、小説としての「もの」  
——ゾラ『テレーズ・ラカン』論

和田 光 昌

« Animal » comme fatalité, « chose » comme roman  
--- à propos de *Thérèse Raquin* de Zola

Mitsumasa WADA

西南学院大学学術研究所  
フランス語フランス文学論集  
第 55 号 抜 刷  
2012（平成24）年 2 月

# 宿命としての「動物」、小説としての「もの」 ——ゾラ『テレーズ・ラカン』論

和田 光 昌

## 1. 宿命としての動物性

ゾラの『テレーズ・ラカン』[1867]には動物が氾濫している。一つながりの動物性の比喩が、一貫して展開されている。アフリカからラカン夫人の元に連れて来られた子供の頃から、テレーズには「猫のようなしなやかさ<sup>1</sup>」があり、カミーユと喧嘩するときは、「獣のような野蛮さ<sup>2</sup>」を発揮する。「野獣の眼<sup>3</sup>」、「牡牛の首<sup>4</sup>」を持つロランは、テレーズの頭をかかえて「野獣のように抱擁<sup>5</sup>」する。グリヴェは、老婦人の夕食会に「獣の本能<sup>6</sup>」によって毎週通うが、そこに集う客たちは、「ガチョウのように愚か<sup>7</sup>」なものたちばかりである。

しかし、とりわけ注目に値するのは、この小説において、動物は人間の宿命に他ならないことである。少なくとも、作者の意図として。自然主義の誕生を告げるとされるこの作品について、ゾラは、第2版の序文 [1868] でその意図を次のように説明している。

つまるところ、私が望んだことはただ一つ。すなわち、強い男と満たされ

<sup>1</sup> Émile Zola, *Thérèse Raquin*, édition de Robert Abirached, Gallimard, « folio », 2001 [1979] [*ThR*], ch.2, p.40.

<sup>2</sup> *ThR*, ch.2, p.43.

<sup>3</sup> *ThR*, ch.11, p.103.

<sup>4</sup> *ThR*, ch.5, p.58.

<sup>5</sup> *ThR*, ch.21, p.193. 以上の比喩については次を参照。cf. Philippe Hamon, *Préface, Thérèse Raquin*, « Pocket », 1991, p.9.

<sup>6</sup> *ThR*, ch.4, p.54.

<sup>7</sup> *ThR*, ch.27, p.246.

ない女がいたとき、彼らの中に獣を探すこと、獣しか見ないこと、激烈なドラマのなかに二人を投げ入れ、そして、彼らの感覚と行為を綿密に記すことである。私は、ただ、外科医が死体にするような分析作業を、生きた二つの身体にしたにすぎない<sup>8</sup>。

ロランとテレーズの中にある「獣」[bête] は、直前の一節では「人間のけだもの」[brutes humaines] とも呼ばれている。

『テレーズ・ラカン』のなかで私が研究しようとしたのは気質であって、性格ではない。この書物の全てはそこにある。神経と血に完全に翻弄され、自由意思はなく、自らの肉体の運命によって人生のひとつひとつの行為が導かれるような登場人物を選んだのである。テレーズとロランは人間のけだものであり、それ以上のものではない。けだものなかに、情熱がひそかに及ぼす作用、本能の圧力、精神発作後の発狂などの過程を、一步一步たどろうとしたのだった。小説をていねいに読んでほしい。そうすれば、各章が生理学の興味深い症例研究になっていることがわかるだろう<sup>9</sup>。

「人間のけだもの」という表現は、のちの『ルーゴン・マッカール家の人々』第17巻、『獣人』*La bête humaine* [1890] を思い起こさせる。ともに妻と愛人が共謀して夫を殺害しようとする物語である。人間の中に潜むとされる獣性を暴き立てるのに格好の主題であることは容易に想像される。獣性あるいは動物性は、人間の理性や良心、それらの働きかけの結果としての不安やためらいに、最終的に勝利する力の総体としてとらえられている。ここでのゾラの言葉でいえば「気質」である<sup>10</sup>。性格ではなく、気質を描いたとゾラが言うとき、それは、19世紀後半のフランス文学の大きな潮流をなす生理学的傾向、科学とくに医学的知の文学への援用を踏まえている。自らをなぞらえるのにゾラが持ち出す「外科医」の比喻は、フロベールの『ボヴァリー夫人』の文体を評するのに

<sup>8</sup> *ThR*, p.25.

<sup>9</sup> *ThR*, p.24.

<sup>10</sup> 後の『獣人』では、それが「遺伝」になったと考えられる。

用いられた「解剖刀」の延長線上にある。登場人物の心理の機微や個性ではなく、テーヌ流の決定論を証立てるために小説を書くこと、それはフランス文学の伝統ともいえる心理小説の否定に他ならない。『テレーズ・ラカン』が自然主義文学宣言とされる所以である。

この小説は、「二つの異なった気質の間で生じる可能性のある奇妙な結合」、すなわち、気質の異なる男女が結びつくとき何が生じるかを説明し、「多血質の性質が、神経質の性質に接触したことによる深い混乱」を示したものであり、その意味で、「二人の愛は欲求の充足」にすぎず、彼らの犯す殺人も、「狼が羊を殺すのを受け入れるように受け入れる」ことになる。「良心の呵責と呼ばざるをえなかったものも、たんなる器質障害、切れそうなまで張りつめた神経系の反乱」にすぎない、とゾラは主張する。「魂が完全に欠如<sup>11</sup>」しているのも、作者がそのような造型した以上、当然のことである。

ゾラの構想では、したがって、二人の主人公が自らの運命に逆らう可能性は認められていない。実際、彼らが関係した直後にあたる7章冒頭には、「初めから、恋人たちは彼らの関係を、必然的で、宿命的、ごく自然なものだと思った<sup>12</sup>」とある。さらに、その少し後に、「抑制なしに身をゆだね、情熱によって突き動かされるがまま、まっしぐらに進んでいく<sup>13</sup>」テレーズが、感極まって、恋人に興味をもったときのことを物語る一節がある。

あなたがここで絵を描いていたときのこと、覚えているでしょ。宿命の力で、わたしはあなたの傍を離れることができなかったのだわ。あなたの空気を吸うことができ、わたしは、苦しくなるほどいい気持ちだったのよ<sup>14</sup>。

「宿命の力」[une force fatale] という表現で、ロランとの結びつきの必然性が強調されている。この必然性は、『第二版序文』を信じるなら、多血質と神経質という二つの気質の結合の必然性であり、『テレーズ・ラカン』は、生理学的宿

<sup>11</sup> *ThR*, p.24-25.

<sup>12</sup> *ThR*, ch.7, p.71.

<sup>13</sup> *ThR*, ch.7, p.74.

<sup>14</sup> *ThR*, ch.7, p.77.

命を描いた作品ということになる。フィリップ・アモンは「生理学的宿命」[fatalité physiologique<sup>15</sup>]という言い方をしている。そして、もし気質のみによって行動する人間が「けだもの」であるとするなら、この宿命は動物性の宿命ということになる。二人が関係を「ごく自然な」[toute naturelle]ものと思ったというときの、「naturel」という形容詞は、人為にたいする「自然」、この場合でいえば、「気質など所与の身体的・器官的条件にもとづいた」という意味にとることさえ可能かもしれない。

このように、『テレーズ・ラカン』には、序文で表明されているような意味での、気質＝宿命としての動物性のレベルが存在する。生理学という科学の動物性である。

## 2. 猫のフランソワ

しかしながら、この小説には、テレーズとロランだけでなく、他の登場人物にも動物性が多くまとわされており、それは必ずしも科学の、気質的宿命という意味でのものではない。ゾラは、『第二版序文』で、「科学的目的<sup>16</sup>」にもとづき、症例研究として小説を著したと主張したが、それは、語りの技法、というかむしろエコノミーからいえば、物語全体が、二つの気質が出会ったことによる科学的・必然的効果として導き出され、科学的言説が、ジュネットの言う、「ゼロ動機づけ」の根拠となっていることを意味する。「暗黙の動機づけ」としての科学が新たな「本当らしさ」となっているのだ。実際、小説は、そぎ落とされた簡潔な文体で、ごく限られた登場人物の行動、相互作用とその結果を淡々と描きながら進行する。視点が限定されているわけではなく、物語世界外から、いわゆる「全知の語り手」によって語られるのだが、行動の動機づけは最小限に抑えられている。

動物性とは気質であり、すなわち科学的運命であるという暗黙の、あるいはパラテキスト的理解が支配するこの物語世界にあって、科学に回収できない動物性を体現しているのが、猫のフランソワである。しかも、猫のフランソワは、

<sup>15</sup> Philippe Hamon, *op.cit.*, p.14.

<sup>16</sup> *ThR*, p.24.

動物である以上、動機づけを付与されることはなく、結果的に語りのエコノミーに貢献している。自然主義的「本当らしさ」としての科学的（気質的）動物性と、動機づけゼロでありながら、暗黙の了解のない恣意的物語を構成する、猫のフランソワの動物性。ジュネットによる動機づけについての三つの物語タイプ<sup>17</sup>のうち、暗黙の動機づけを伴った第一のタイプと、動機づけの欠如した、「動機づけが不在であるという動機づけ」による第三のタイプが、動物性の物語としての『テレーズ・ラカン』に混在しているように思われる。乾いた、「贅肉の切り落とされ」、「精練された<sup>18</sup>」語りには、このように、同じエコノミーを共有するものの、性質の全く異なった二種類の動物性が混在しているのではないか。

猫のフランソワは、テレーズとロランのアヴァンチュールの望まれない同伴者である。「必然的で、宿命的」な関係がまだ始まったばかりの頃、しだいに大胆になった二人が夫婦の寝室で密会を重ねるとき、テレーズが、猫に目撃されているから、もし猫がしゃべったらどうなるかしらと冗談を言う場面がある。この冗談に、ロランは「背筋をぞくっと」させる。そして、テレーズと結婚した初夜、同じ夫婦の寝室にカミーユの幻覚があらわれると、二人は「恐怖にとらわれ」、部屋の外、階段で音がするのにおびえるが、それは猫のフランソワだった。

興奮と心配にとらわれていたとき、猫が、カミーユの仇をとるために彼の顔に飛びかかってくる気がした。この獣はすべてを知っているに違いなかった。奇妙にふくらんだ、丸い眼のなかに、いろいろな考えがつまっていた。獣がじっと見つめるので、ロランは眼を伏せた。フランソワに足蹴りをくらわそうとしたとき、テレーズが叫んだ。

「ひどいことしないで。」

この叫び声は、奇妙な作用を引き起こした。彼の頭は、馬鹿げた考えで一杯になった。

「カミーユがこの猫の中に入っているんだ。この獣を殺さなくちゃいかん…

---

<sup>17</sup> Génard Genette, «Vraisemblance et motivation», *Figures II*, Seuil, «Points», 1969, pp.71-99.

<sup>18</sup> Hamon, *op.cit.*, p.15.

人みたいな様子をしてやがる。」と彼は考えた。

蹴るのは止めにした。フランソワがカミーユの声色で話すのを聞くのが怖かった。すると、テレーズの冗談のことを思い出した。愛欲にふけっていたとき、彼らが接吻を交わすのを目撃されていたときのことだ。この獣は知りすぎており、窓から放り投げなければならないと、そのとき彼は思った。しかし、そんなもくろみを実現するだけの勇氣はなかった<sup>19</sup>。

ロランは、「すべてを知っているはずの」猫フランソワの眼、視線に悩まされ続ける。もっとも、猫の眼のなかに「つまっている」、「いろいろな考え」とは、実のところ、ロラン自身が考えていることの反映にすぎないと考えられる。猫がカミーユのために復讐しようとしているとか、カミーユが入っているなどというのは、すべて、殺人を犯したことの自責の念、良心の声であり、後悔によるものである。フランソワに見つめられて、ロランは「眼を伏せ」る。視線の戦いに負けた彼は、力で勝とうとするが、足蹴りはテレーズに止められ、窓から放り投げて殺すまでの勇氣もまだない。

ロランが「知りすぎた」猫を実際に窓から投げ捨てて殺すのも、この視線の戦いに再度敗北した結果である。

夜、麻痺状態から彼が抜け出すのは、盲目的で幼稚な怒りに我を忘れるときだけだった。テレーズと喧嘩したり、ぶつたりするのに飽きると、子供のように、壁を蹴ったり、何かみつけては壊すのだった。そうすると気が休まった。虎猫のフランソワに対して、特別な憎しみを抱いていた。自分の姿を見るとすぐ、手足の動かなくなった老婦人の膝の上に避難していく。猫をまだ殺してないのは、本当に、捕まえようという気になれなかったからだ。猫は丸い大きな眼で、悪魔のようにじっと彼をみつめていた。彼を苛立たせるのは、この、彼に向けていつも大きく開かれた眼だった。自分を見つめて離れないこの眼は何を言いたいのかと彼は考えた。馬鹿げたことを想像し、しまいには、本物の恐怖を覚えるようになった。食事中

---

<sup>19</sup> *ThR*, ch.21, p.196-197.

の、ちょっとした時、喧嘩したり沈黙が長くつづく時など、ぱっと振り向くと、重苦しく呵責のない様子で彼のことをじっと見つめているフランソワの眼に出くわすのだった。彼は青ざめ、わけがわからなくなり、「ほら、しゃべってみやがれ、俺にどうしろというんだい、いいから吐けよ」と、喉の先まで出かかるのだった<sup>20</sup>。

ここでも、「彼を苛立たせるのは」、「悪魔のようにじっと見つめる」「丸い大きな眼」である。猫の視線に出くわすと、視線に耐えることができず、眼が語っていると彼が考えるものを自ら明らかにしたいという誘惑に抗うことができず、自分を危うくすることばを無理やり猫から引き出そうとする。

「悪魔のような」視線を持ち、「馬鹿げたこと」を想像させる猫。アモンは、猫のフランソワを「小説の中で良心のように開かれた眼<sup>21</sup>」と呼び、人間的部分と動物的部分に分かれた人格の二重化への契機—フロイトの無意識への道—ととらえている。気質としての動物性という小説の論理に背く「裂け目」であり、そこに父の名を見ている。フランソワは、エミールの父の名である。

しかし、ここでは、むしろ、猫のフランソワの存在が明らかにしている二重性を、ことばと視線の二項対立として考えたい。すでに見たように、フランソワの視線が問題となっているとき、猫がことばを話すことができるかどうか、必ず問題となっているからである。

そもそも、フランソワが重要な「登場人物」のようにあらわれるのは、前述した、テレーズが猫のことばを代弁して戯れる場面においてである。

また別のある日、テレーズは奇妙な考えを思いついた。ときどき気がふれたみたいになって、おかしいことを言うのだ [délirait]。

虎猫のフランソワが、寝室のちょうどまんなかに、床にべったり座っていた。重々しげで、じっと動かず、丸い眼で二人の恋人を見つめていた。入念に、まだたきもせず、一種の悪魔的恍惚に浸って、彼らを観察するの

<sup>20</sup> *ThR*, ch.30, p.281.

<sup>21</sup> Hamon, *op.cit.*, p.9.



だった。

「ほら見てちょうだい。この子 [=猫のフランソワ] はわかっていて、今晚にでもカミーユに全部話してしまいそうだわ」とテレーズはロランに言った。「ほら、おもしろいじゃない、そのうちお店でフランソワが喋るようになったら。わたしたちのいいことまで知ってるんだから。」

フランソワがことばをしゃべるかもしれないと考え、テレーズは特別に面白がった。ロランは猫の大きな緑の眼を見たが、戦慄が体中に走るのを感じた。

テレーズは続けた。「こんなふうにするのよ。ずっと立ち上がって、片方でわたしを指し、もう片方であなたを指しながら、大声で言うのだわ。『旦那様と奥様は寝室で、ぴったり抱き合っています。僕のことを疑いもしてません。でも罪ある愛は、大嫌いな僕です。どうか二人を牢屋に入れてください。そうすればもう邪魔されないで昼寝できますから<sup>22</sup>。』」

猫の眼をことばに翻訳するのはテレーズであり、彼女の錯乱 [délire] である。ことばを話すかもしれない猫は「悪魔的恍惚」のなかにいるとされる。視線とことばの間の障壁がなくなることに、ロランは最初から「戦慄」を覚えている。動物と人間の境界は、視線しかもたないものと、ことばを持つものとの境界であるとされ、その境界侵犯の恐怖は、ついには猫の殺害にまで及ぶほど大きい。

しかし、たとえ猫が姿を消しても、まだ、猫と同じように視線だけが際立った意味を持つ存在がいる。麻痺にかかり、手足ばかりか舌も動かさなくなってしまうラカン夫人である。

先の引用で猫と親和的なのはテレーズだが、ロランが興奮して猫にしゃべることを強要する次の場面においては、猫はラカン夫人の延長のようなものと化している。これは、麻痺の発作後のことである。

文字通り、ロランはフランソワが怖かった。とくに、そこからなら緑の眼でどんなに敵を見つめても罰せられることはありえないとばかりに、難攻

---

<sup>22</sup> *ThR*, ch.7, p.79-80.

不落の要塞に身を寄せるようにして、手足の動かなくなった老婦人の膝元で暮らすようになってからは、カミーユを殺したこの男は、いらだった獣と麻痺した女との間に漠然とした類似を認めるのだった。この猫は、ラカン夫人同様、犯罪のことを知っており、いつか言葉を話すことがあったら彼のことを告発するだろう<sup>23</sup>。

息子殺しを告発することができず、「自分の子供を殺した、二人の子供たち」の姿をじっとながめることしかできない夫人は、より猫に近い存在である。彼女が猫にとって「要塞」となり、また、猫とラカン夫人の間に「類似」が認められるのも、そのためである。

小説の結末で、最終的に勝利するのは視線である。猫は殺されたが、動物的まなざしは死なない。二人が心中のようにして毒薬を半分ずつ飲んでともに自殺するとき、ラカン夫人は「終幕が近いことを感じ、じっと鋭い眼 [avec des yeux fixes et aigus] で彼らをながめていた<sup>24</sup>」とある。また、彼らの自殺後、足元に横たわる二人の死体を熟視し、彼らを「重苦しい視線で押しつぶしたのだった」という、小説最後の一文は、この「重苦しい視線」[regards lourds] という語で終わっている。この視線、じっと動かない、「重苦しい」視線は、まさに、「重苦しく呵責のない様子でじっと見つめている」フランソワのものと同じである。いわば、ラカン夫人は、死んだ猫の視線を引き継いだのである。そのような視線の受け渡しは、どのようにして可能になったのだろうか？

### 3. ラカン夫人

猫のフランソワと違い、ラカン夫人は、ことばと視線の対立を自ら体験する。ことばを話すのではないかと人間から一方的に思われ、恐れられ、ついには殺されてしまう猫よりも、麻痺により言語を奪われたものの意識は鮮明な夫人の方が、より深く、内部から両者の亀裂を生きている。

この違いは、奇妙なやり方で、視線の存在感の違いに対応している。すなわ

---

<sup>23</sup> *ThR*, ch.30, p.282.

<sup>24</sup> *ThR*, ch.32, p.300.

ち、猫とラカン夫人は、同じく視線のみによって殺人者たちとかかわりをもつ存在でありながら、前者の視線が、ことばへ越境するのではないかと殺人者たちから一方的に思われ、恐れられるのに対し、後者の、ことばを失い、「半ば死体」となったものの「視線のことば<sup>25</sup>」は、二人の関心をひかない。

麻痺に侵され手足も舌も動かすことのできなくなったラカン夫人は、もはや言語を操ることができない。たんに口がきけなくなっただけでなく、文字を指の動きで示そうとする「新たな言語」の試みもあえなく失敗する。復讐の念は、けっして伝達されない。木曜ごとに催される夕食会の客を前に、「超人的努力」で、指を動かして単語をつづろうとするが、「テレーズとロランは」まではなんとか伝えることに成功したものの、麻痺により中断されてしまう。結局、グリヴェに、わかったとばかりに、「テレーズとロランは、わたしの世話をよくしてくれる」と読み取られる始末である。老婦人はわが手を呪い、もう死んだ息子のところにいくしかないと思い、「墓の夜の中にいる気がする<sup>26</sup>」。

そもそも、手足が利かなくなっても、子供たちに献身的に世話されて夫人ははじめ幸せだった。それが打ち砕かれるのは、一対一の関係になっていっそうカミーユの亡霊につきまといられるようになった二人が、夫人がいるのもかわらず思わず発した文句や、発作の時ロランが吐いたうわ言などによって、すべてが明らかになったときである。老婦人は、「死体に電気が走った」ようなショックを味わい、「恐怖の叫び」を発する。この非情で「不吉な真実」を確信せざるをえなくなったとき、彼女は「別の存在・生き物」に変身してしまう。

テレーズとロランが、確かにカミーユを殺したのだ、彼女が育て上げたあのテレーズと、優しく献身的な母として愛したあのロランが。けたたましい音をたてる巨大な歯車のように、このことが彼女 [=ラカン夫人] の頭の中でぐるぐる回った。[略] ただ一つの考えが、機械的にそして容赦なく、ひき臼のような重みと執拗さで、彼女の頭脳を打ち砕くのだった。「わたしの子供を殺したのは、私の子供たちだった」と思った。絶望を表す他

<sup>25</sup> *ThR*, ch.26, p.235.

<sup>26</sup> *ThR*, ch.27, p.250.

の言い方は見つからなかった。

彼女の心は突然変化し、元の自分を探しても果たせず、自分が自分でなくなった。復讐の思いに突如として征服され、うちのめされて、彼女の生から善良さは丸ごと取り除かれた。この変化が成しとげられたとき、こころの中が真っ暗になった。滅びようとしていく肉体のなかに、新しい存在が生まれるのを感じた。残酷で容赦なく、息子殺しの二人に嘔みつきかねない存在だった<sup>27</sup>。

この「新しい存在」は、動物を思わせる。復讐のために嘔みつく動物。つまり、ラカン夫人は、動物に「なる」。少なくとも、なろうとする。

そもそも、『テレーズ・ラカン』において、嘔む行為は、すぐれて動物的な行為として表象されている。もちろん、物語の中で、実際にロランに嘔みつくのは、河に突き落とされたカミーユである。しかし、その後、その嘔み傷に長くロランが苦しめられるようになったとき、それは、嘔み傷のなかに「押し込まれた獣」がいるせいだとされる。

彼〔ロラン〕のもっとも鋭い痛み、肉体的精神的痛みは、カミーユが彼の首に残した嘔み傷から来ていた。時によっては、彼の身体全体がこの傷跡でおおわれている気がした。たまたま過去を忘れるようなことがあると、突き刺すような激しい痛みがするように思い、殺人のことが、肉体にも精神にも思い出されるのだった。[略]このような、彼につけられた生きた傷は、すこしでも乱調があると、眼覚め、赤くなり、彼に嘔みつくのだった。彼は恐怖を覚え、苦しめられていた。しまいには、溺死したカミーユの歯が、そこに獣を押しこみ、自分をむしばんでいるのだと思うようになった。傷のある首の部分は、彼の身体の一部ではないような気がした。この場所に埋め込まれた、よそものの肉のようなものであり、自分の筋肉を腐らせる毒入り肉のようなものだった。つまり、至る所、自分の罪の生きた思い出、自分を食いつくす思い出を持ち歩いていたのだ<sup>28</sup>。

<sup>27</sup> *ThR*, ch.26, p.242.

<sup>28</sup> *ThR*, ch.30, p.280.

「自分の身体の一部ではない」「よその肉」、「毒入り肉」とされる噛み傷は、他者あるいは裂け目として罪を対象化し現前化する猫のフランソワと同じ機能を果たしているが、さらに、そこに押し込まれた「獣」が、自分の肉を喰いつくすとロランは考えるというくだりにいたっては、カミーユもまた、ラカン夫人同様、死の瞬間に獣化したのではないかと思わせる。それほど、罪の意識を対象化する存在としての動物と、その噛む行為は比喩として際立っている。

しかし、ラカン夫人は、猫のフランソワや、噛み傷の中にいるとされる想像上の獣とは異なり、息子の殺人者たちに影響力を行使できない。にもかかわらず、なぜ彼女は、視線として、最終的に二人に勝利するのだろうか。それは、彼女が、積極的に復讐することをあきらめ、すすんで「身を消し」、視線のみの存在になるからである。

身体の麻痺した老婦人は、木曜の夕食会の陰鬱な平穏さの底に卑劣な行為が隠されていることを、彼ら [=客] に明かそうとはもうしなかった。殺人を犯したものが引き裂かれているのを目の当たりにし、いつかそのうち爆発が起こることになると予感し、次から次へと宿命的に起きる事柄に導かれ、彼女は、とうとう、事態 [faits] は彼女を必要としないのだと理解した。ただちに、彼女は身を消し、カミーユを殺した結果が効力を発揮するがままに任せた。今度は殺人者の二人を、殺してくれるに違いなかった。予想通り、強烈な結末が訪れるのを目にするまで、命がつづくよう天に祈るばかりだった。テレーズとロランが最期の苦しみを打ち碎かれる光景を見る眼福が、彼女の最後の望みだった<sup>29</sup>。

この願いは成就する。最期の場面で、テレーズとロランが毒薬を半分ずつ飲み合って自殺した後に残るのは、ラカン夫人の視線のみである。

死体は、ねじれたまま食堂の床に転がっていた。ランプの灯りの黄色かがった光が、シェードを通して彼らの上に落ちていた。そして、ほとんど

---

<sup>29</sup> *ThR*, ch.32, p.298.

12時間、次の日、正午近くまで、無感覚かつ無言で、ラカン夫人は、足元にいる彼らを熟視していたのだった。眼を堪能させることができないで、彼らを重苦しい視線で押しつぶしながら<sup>30</sup>。

視線の勝利は、自発的動物化＝視線化とでも呼びうるものによってもたらされる。猫の視線は、ロランを恐れさせたが、恐怖はロランのなかにしかなかった。つまり、動物の視線の人への影響力といっても、多分に人間が自分に対して行う反省的なものにすぎなかった。それに対し、ラカン夫人は、視線のみの存在になることを自ら選択する。それは、「新しい存在」の引用で見た、嘔む行為によって象徴される動物的存在になることのようにも思われる。しかし、麻痺に罹った夫人が二人に嘔みつくことはできないのであり、「動物的存在になる」というのは正確な表現ではない。むしろ、小説中で繰り返し語られる表現に従えば、「もののように」なることである。おそらく不動であるがゆえの比喻だろう。それにしても、猫の視線を引き継ぐラカン夫人が、いわば、動物にさえなることができず、「もの」になってしまうとは何事か。動物性に支配されたテレーズとロランに勝利するのは、「もの」になったラカン夫人であるというのは、なんとも寒々とした構図ではないか。「もの」になること、それは、動物性、そして人間と動物の境界をめぐって展開されるこの物語において、どのように位置づけられるのだろうか。

#### 4. 「もの」と子供

麻痺に侵され言葉を話すことのできなくなったラカン夫人は、テレーズとロランにとって、動物を通り越え、「もの」であり、「死体」である。

[手足が麻痺し、ことばを発することのできなくなった] この日以来、夫婦の生活は耐えられないものになり、二人はつらい夜を過ごすのだった。なにかにつけ長々とやさしく話しかけ、恐怖をまぎらせてくれていた老婦人は不随になり、荷物のように、もののように、肘掛椅子のなかに身体を

---

<sup>30</sup> *ThR*, ch.32, p.301.

だらんとさせていた。彼らは、どうしていいかわからず、不安なまま、テーブルをはさんで向かい合うしかなかった。この死体が、二人の間に入ってくれることはもうなかったのだ。忘れ去られ、家具とまちがわれるときもあった<sup>31</sup>。

彼女は、「家具」と間違われるばかりではない。後には、「祈祷台」にまで昇格する。

彼女 [= テレーズ ] は、ラカン夫人を、お涙頂戴式の絶望攻めにした。毎日、麻痺した老婦人を利用するのだった。夫人は、いわば祈祷台として用いられた。その前で、憂いなく、自らの過ちを告白し、許しを求めることのできる家具なのだった。泣き、涙を流して気晴らしする必要があるとすぐ、麻痺した老婦人の前に跪き、叫び、息を詰まらせて、ひとりで悔い改め的一幕を演じた。気は休まったが、弱弱しくもなった。

彼女はつぶやいた。「わたしは憐れな女、恩寵に与る価値のない女です。わたしはあなたを騙しました。あなたの息子を死に追いやったのです。あなたが私を許すことは決してないでしょう。それでも、わたしのなかで、わたしがどんなに後悔の念に引き裂かれているか、お読み取りになれるなら、わたしがどれほど苦しんでいるかお分りになれるなら、わたしのことを憐れにお思いいただけるかもしれません。いえ、憐れんでいただけるような女ではありません。こんなふうにして、あなたの足元で、恥辱と苦悩にうちひしがれて死んでいきたいのです<sup>32</sup>。」

もとより、心から悔いているのではない。「後悔ごっこ」にすぎないことをラカン夫人は理解していた。

ラカン夫人は、麻痺により自らことばを発することができなくなって以来、つねに他者からことばを付与され、浴びせかけられる存在だった。しかも、誤っ

---

<sup>31</sup> *ThR*, ch.26, p.234.

<sup>32</sup> *ThR*, ch.29, p.263.

たものばかりを。二人の罪を告発する指文字は、感謝のことばに誤訳された。ここでも、テレーズを許すつもりは毛頭なく、心はかえって復讐に燃えているのに、否認の言葉一つ発することができないもどかしさに苦しむ。

ラカン夫人を痛めつける責め苦として、後悔を演じる姪の猿芝居以上に恐ろしいものは探してもきっと見つからなかったであろう。それが真実だった。苦悩の吐露の底にエゴイズムが隠されていることを、麻痺した老婦人は見抜いていた。いつも、この長い独白を聞かされるのは、恐ろしい苦しみだった。カミーユを殺したことが繰り返して彼女の面前で語られた。許すことはできなかった。仮借のない復讐心のなかに閉じこもったが、思いは、身動きがとれない分、余計に鋭いものになった<sup>33</sup>。

かきたてられた復讐の念は内側にこもるばかりで、発散させようがない。彼女に唯一可能なのは、眼を閉じて、テレーズを視界から断つことである。

叫ぶことも耳をふさぐこともできないので、彼女 [=ラカン夫人] は、言いたいようなない煩悶でいっぱいになった。そして、テレーズのことばの一つ一つが、彼女の心のなかに入っていった。いらだたしい歌のようにゆっくりとした、哀れがましいことばだった。殺人者たちは、悪魔のように残酷な考えから、この種の責め苦を自分に課しているのだ、と彼女は一瞬思った。身を守る唯一の方法は、姪が自分の前に跪くやいなや、眼を閉じることだった。声は聞こえるが、見えなくなった<sup>34</sup>。

先に、小説結末における最終的な視線 = ラカン夫人の勝利は、彼女が復讐を諦め、「身を消し」、事態を成り行きにまかせたことによると述べたが、このように完全な視線になりきる行為は、おそらく、祈祷台扱いされた彼女が目を閉じる行為を徹底化させたものだと言える。大きな違いは、しかし、眼を閉じる行

<sup>33</sup> *Ibidum*.

<sup>34</sup> *ThR*, ch.29, pp.263-264.



為が、外界を遮断して内面の自分を守ろうとする、防衛的な、ごく人間的態度であるのに対し、視線になりきることは、人間感情を抹殺した自己放棄に他ならない点にある。彼女の勝因はこの飛躍にあり、それによって復讐という最大の目標は達せられる。言い換えれば、母親としての、人間としての復讐心は、人間であることを捨て去って「もののように」なることによつてのみ実現される。このように考えると、殺人者の動物性よりさらに非人間的なところにあるはずの「もの化」を、究極の人間の行為として描き出したところに、小説としての『テレーズ・ラカン』の真髓があるのではないだろうか。それは、『第二版序文』で作者自身が主張する、科学としての、気質としての動物性を凌駕する、より非人間的な非人間性であり、小説テキストとしての、もうひとつ別の、「もの」としての動物性は、まさに、非人間性にまで至る人間的可能性としての動物性を示したところにあるように思われる。

「もの」としての動物性による「裂け目」は、アモンの言う、無意識や父の名によるそれよりさらに深刻なものではないか。なぜなら、無意識なら、気質決定論には反するものの、意識と無意識の間の、ほどよい人間的対立として物語に貢献することになるだろうし、父の名であるなら、物語世界外にわれわれを送り返すだけであるのに対し、「もの」としての動物性は、あくまで物語世界内で、小説の主題であるはずの動物性を、裏打ちすると同時に裏切り、『序文』を否定すると同時に新たな動物性の可能性を開いているからだ。

この、もう一つの動物性による切断は、また、人間（大人）未満の存在である「もの」と「子供」との差異にもあらわれている。「もの化」による視線の勝利という物語終結部において、テレーズとロランが逆に「子供のように」ふるまうという記述は興味深い。

ラカン夫人は、結末が近いのを感じ、二人をじっと、鋭い目つきで眺めていた。

すると突然、テレーズとロランは泣き崩れた。最後の発作に、二人は打ちめされ、ひしと抱き合った。子供のようにもろくなって。甘美で、しみりした何かが、彼らの胸に湧きおこった気がした。言葉も発せず、それまでの汚辱まみれの人生のことを考えて、彼らは泣いた。卑怯にも生き

続けるならそんな人生をまだ送ることになるのだ。それで、過去のことを思い出して、自分自身にあまりに嫌気がさし、うんざりしたので、安息、無を求める気持ちが無限にふくらんだ。彼らは、最後に視線を交わした。ナイフと毒杯を前にして感謝するまなざしだった<sup>35</sup>。

こうして、彼らは、毒を分け合って飲み干し、倒れる。「死の中に慰めを見出し」て。

ことばを発しないものという «enfant» の語源から言えば、「子供」は、ことばを奪われ、「もののように」、視線だけの存在となった老婦人と共通する部分があってもよさそうなものだが、この小説ではそうではない。「子供」は、冷徹な真実に耐えることのできない、かawaii存在の比喩として用いられている。真実にうちくだかれ、「半分死体」となっても、視線のみの存在として生き続けることを選択する、「もの」としての態度と正反対である。もちろん、ラカン夫人も、はじめから「ものよう」だったわけではない。介護され始めたときは、「子供のように」扱われたのである。

老婦人は、二人にとって、悪夢から引き離してくれる気晴らしのようなものになった。身体が自由が利かなくなっただけから、子供のように世話をやかなくてはならなかったのだ<sup>36</sup>。

ところが、何くれとなく自分の世話をしてくれるテレーズとロランが、実は最愛の息子を殺した犯人であるという「不吉な真実」を知り、麻痺した身体を稲妻のように貫かれて、「新たな存在」となったとき、彼女は「子供」であることをやめる。

60年以上も、神様は彼女をだましていたのだ。おとなしく善良な少女のように扱い、安らかな喜びという嘘で固めた絵空事で彼女の眼を楽しませて。

---

<sup>35</sup> *ThR*, ch.32, p.301.

<sup>36</sup> *ThR*, ch.26, p.235.

そして、彼女は子供のままだったのだ。あまたのおめでたいことを愚かにも信じ、現実の生活が、情熱で血だらけの泥沼のなかをはいまわるのが見えなかったのだった。神様は意地悪だ。真実を彼女にもっとはやく言うか、何も知らず、何も見ないまま行かせてくれるか、どちらかにすべきだったのに<sup>37</sup>。

「真実を知らない状態＝子供」という図式が成り立っている。ラカン夫人が子供であることから脱するのは、最期の瞬間に子供になるテレーズとロランと逆の方向性である。

このような観点から、小説結末部を再検討すると、「もの」になったラカン夫人が、「子供」のテレーズとロランを凌駕し、最終的に勝利するのも当然であると理解される。「子供のようにもろく」なり、「安息」を求めて、「感謝のまなざし」で毒杯を仰ぐテレーズとロランは、「無感覚かつ無言」のラカン夫人の「重い視線」の前で、死体として横たわるしかない。テキストとしての小説が、『序文』から離陸する瞬間である。

---

<sup>37</sup> *ThR*, ch.26, p.241.